

はなの輪



広島市植物公園植物友の会

2026年7月－9月 通巻第188号



リョウブ科の落葉高木で、北海道南部から九州各地の丘陵地や山地の尾根など乾いた林内に生育します。特に重金属に対する耐性が高いので、栃木県の足尾鉾山や金属精錬所跡地などで群落を作っています。

6～8月に枝先に長さ10～15cmほどの数本の花房をつけ、白い花を咲かせます。

果実は直径3～4mmで毛が密生します。熟すと裂開し、中から小さな種子が多数出ます。

木材はち密で堅く、器具や洋傘の柄に用いるほか、良質の木炭になります。樹皮つきのまま床柱に利用されることもあります。

漢字で「令法」と書く名前の由来として、「令」は基準量の意味、「法」は官令を指し、平安時代初～中期の律令制時代に農民の田畑面積に対して、一定量のリョウブを植えさせ、葉を採取して貯蔵することを命ずる官令（令法）がそのまま木の名前になったと考えられています。

リョウブの葉は、若葉をゆでてから陰干しして保存します。十分に乾燥できていれば1年以上保存でき、夏に土用干しして竈で燻したものは5年以上保存ができるそうです。

かつては、乾燥させた葉を刻んでご飯と一緒に炊いたり、粉にしたものを米や粟の粉に混ぜて団子にしたりして食べていたそうです。

リョウブの炊き込みご飯を食べてみた人の感想では、「癖がないというだけで、おいしいかどうかは微妙・・・。」ということでした。食糧事情が良くなった現在では食用として利用することがなくなったのもうなずけます。

しかし、多くの木の葉がまずかったり、毒があったりすることを考えると、何処でも簡単に手に入って、保存もできるリョウブは米の増量剤として優れたモノだったのでしょうか。

林内でのリョウブの状況で面白いものとして、シカによる皮剥ぎがあります。

リョウブの樹皮は柔らかくはぎやすいのか、おいしいのかわかりませんが、他の樹木より先にシカによる皮剥ぎ被害を受けています。

シカが多く生息している広島市森林公園内のリョウブはほぼシカによる皮剥ぎ跡が見られるのですが、他の樹木はほとんど皮剥ぎ跡がないので、シカが積極的にリョウブの樹皮を食べているようです。

また、佐伯区湯来町では、シカはあまりいないとされていた10年ほど前までは、リョウブに皮剥ぎ跡はありませんでしたが、5年ぐらい前からあちらこちらで皮剥ぎ跡を見るようになっていました。

山林内ではリョウブの皮剥ぎ跡の方が、シカのフンや足跡よりも見つけやすいので、探してみるのも面白いかもしれません。

[文・写真：竹本 香織]



《開園50周年特別展示》 熱帯性スイレン50年の歴史



アリア



リキットファー



職員オリジナル品種

広島市植物公園が開園50周年を迎える今年は、『熱帯性スイレン50年の歴史』を7月15日～8月31日まで熱帯性スイレン温室で実施します。当園の歴史と同じ、この50年という年月の間に作出されたスイレンの名花たちを年代ごとにまとめ、温室内のプールと睡蓮鉢で展示します。日本では当園しか保有していない品種や職員オリジナル品種など普段目にする事のない希少な品種もありますので、お見逃しなく！

[文：佐藤 祐輔、写真：西内 良]



植物公園花ごよみ



7月～9月に見ごろを迎える植物



7月～9月

タイタンビカス
(カスケード)



7月～9月

マリーゴールド
(カスケード)



7月～9月

ルリマツリ
(花の進化園)



9月頃

サガリバナ
(大温室)



7月～9月

ヤコウボク
(大温室)



7月～9月

スイレン‘カーラズサンシャイン’
(スイレン温室)



7月下旬～8月上旬

サギソウ
(フクシア温室外、里山の野草園)



7月～9月

プルメリア
(サボテン温室)



7月中～下旬

カライトソウ
(ロックガーデン)



8月～9月

オミナエシ
(里山の野草園、花の進化園)



7月下旬～8月

ヒマワリ‘サンフィニティ’
(森のレストラン前)



7月下旬～8月

ヒゴタイ
(里山の野草園)

園芸ワンポイントレッスン



《屋内植物》 食虫植物の植え替えについて

食虫植物は意外と繊細な植物です。サラセニアやハエトリグサなどの植え替えは早春が適期です。それ以外の時期は株に負担がかかります。特に根を傷めてしまうと回復に時間がかかるものが多く、細く切れやすい根を持つ食虫植物の植え替えは丁寧さがポイントになってきます。今回は家庭で育てられるサラセニア、ハエトリグサについてお伝えします。

必要なもの

底石（1 cmほどの大きさ）、プラスチック鉢（素焼き鉢でも可）、水苔

- 1 根を傷めないよう慎重に鉢から取り出す。
- 2 傷んでいる植え込み材があれば取り除く。
- 3 鉢底2 cmほどに底石を入れておく。
- 4 水苔で根を傷めないように巻き、鉢に植える。



サラセニア

基本的にはこの方法でどの種類でも植えることができます。

この植え方+ 1 cmほど鉢を水につける「腰水」で元気に育ちます。

（ハエトリグサ、モウセンゴケ、サラセニア）

[文：上野明 楽]



ハエトリグサ

《屋外植物》 四季咲き性バラの夏剪定

四季咲き性バラの夏剪定は、秋花の開花を揃えることを目的に、夏の暑さのピークが過ぎてから行います。当園では20年ほど前までは8月下旬から9月上旬に行っていましたが、最近は夏の暑さが厳しいうえに遅くまで続くので、その頃より2週間程遅い9月上旬から中旬まで行っています。多くの品種は剪定後45日程度で開花に至ります。以下にバラの夏剪定のポイントをまとめます。

①対象とするバラの種類は、ハイブリッド・ティー系やフロリバンダ系など四季咲き性で、かつ木立性のもので。

②対象とする株は、健全で生育旺盛のものとし、夏バテをした株、病気で葉が落ちてしまった株、新苗などは強く剪定せず、葉をなるべく多く残し、花は咲かせず蕾が小さなうちに摘み取ります。

③夏剪定では、二番花が咲いた枝の中ほどまで切り戻します（図参照）。その時、葉の付け根のすぐ

上5mm~1cmで切ります。およそ葉がついている向きに枝が伸びるので、日当たりよく風通しよい樹形となるよう、基本的には株の中心より外に向かって生えている葉の上で剪定します。

④夏剪定の1週間程度前に軽く速効性の肥料などをまいておくと、剪定後の芽吹きが良くなります。

[文・図：井上 尚子]

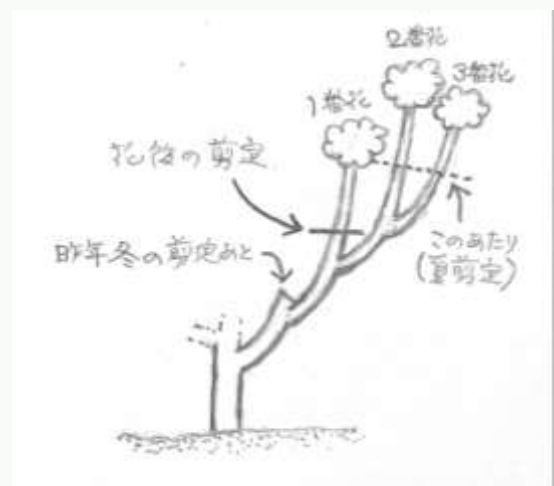


図 夏剪定の位置

広島市植物公園は、今年の11月3日で、1976（昭和51）年に開園してから満50年となります。このコーナーでは、4回にわたり、50年の歳月を感じさせてくれる植物などをご紹介します。

今回は、大温室とその周辺からです。

大温室は、開園前の1975年に完成し、当時は1室のガラス温室としては「東洋一」の大きさとして、園を象徴する施設となっていました。その後、2016年2月から改修のため休館し、2018年3月に新装開館しました。改修の間、レイアウトの変更に伴い植えていた多くの植物を移植、または更新しましたが開園当時から変わらず同じ場所で栽培を続けている植物がいくつかあります。

ココヤシ

大温室正面から入ってすぐの池のそばに植栽しています。ココヤシ自体は通常、ある程度樹齢を重ね、結果として樹高が高くなると開花しない性質を持っており、天井が10mくらいの温室であれば開花前に天井に届いてしまい切り倒さなければならず、開花だけでなく、おなじみの「ヤシの実」も実りませんが、本園の大温室は高さが最高21mと高く、開花・結実させることができます。実は、ココヤシを栽培するために温室が必要な地域では、ココヤシが結実している姿を見ることは、貴重な体験なのです。とはいえ、さすがに50年、天井が近くなってきました。あと何年この姿を見ることができるのでしょうか。（「黄金ココヤシ」など、比較的樹高が低くても結実する種類があり、このような種類が植栽されている例をよく見ます。本園にも植栽しています。）



アコウとガジュマル

大温室の奥、滝の前あたりにあります。アコウもガジュマルも熱帯地域原産のイチジクの仲間で、別の樹木などに取りつき、自らの枝葉を広げて取りついた植物の光合成を妨げるとともに、幹や気根などで物理的に締め付けることにより、最後には取りついた植物を



枯らしてしまう「絞め殺し植物」という恐ろしい呼び名を持っています。当該の株は絞め殺し植物同士が絡み合っている状態で（見た感じではガジュマルがアコウを締め付けている印象が強い）、その様子を来園者に紹介する目的で植えたのですが、職員が適宜枝を剪定するなどの管理を続けているおかげか、未だどちらが勝利するでもなく、絶妙なバランスを維持しています。

ワシントンヤシモドキ

大温室横、熱帯スイレン温室の前に4本立っており、今では大温室の一段低い天井よりも高くなっています。開園当時の様子を示した下の写真（熱帯スイレン温室が無い！）で見ると、大温室入り口ロビーよりも少し高い程度だったので、50年で大きくなったことがわかります。強風時に枯葉が落ちて危険なので、定期的に高所作業車で枯葉を



除去しますが、年々大変になっています。

植物観察入門

『樹形の不思議：ウコギ科植物の対照的な生存戦略』

植物にとって光は限られた資源です。自らの葉が重なり合えば個体全体の受光量は制限され、光合成生産量は低下します。そのため樹木は、葉柄の長さや角度を調整し、光を効率的に獲得するための最適化を図っています。

ウコギ科植物を比較すると、そこには対照的で興味深い差異が見て取れます。林床に生育する常緑樹のカクレミノやヤツデは、上部の葉柄を短く、下部の葉柄ほど長く伸ばすことで、全体として傘のような形を作り、外縁部から届く光を効率よく捉えます（図中A）。対して落葉樹のコシアブラやタカノツメは、上部の葉柄を長く伸ばして遠方の光を優先的に確保し、下部の葉は、上部がカバーしきれなかった内側の空白を埋めるように配置されます（図中B）

近年の研究によると、後者の「上部の葉柄ほど

長い」という構造は、世界的にも珍しい樹形デザインであることが明らかになりました。一見すると対極にある、これら二つの構造ですが、いずれの配置であっても、個体全体の受光効率をほぼ同等に高く保てるのが数理モデルによって実証されています。これらの戦略もそれぞれの環境における優れた「最適解」として成立しているようです。

林床の薄暗い環境で全方位からの光を漏らさず捉えたい常緑樹と、明るい林冠を目指して素早く上へ伸びたい落葉樹という生き方の違いが、この対照的な戦略を生み出したのかもしれませんが、なぜ異なる戦略が併存するのか、特定の環境下でどちらがより適応的なのか。この差異が生存や繁殖に及ぼす意味については、現在も調査が進められています。 [文・図：山本 晃弘]

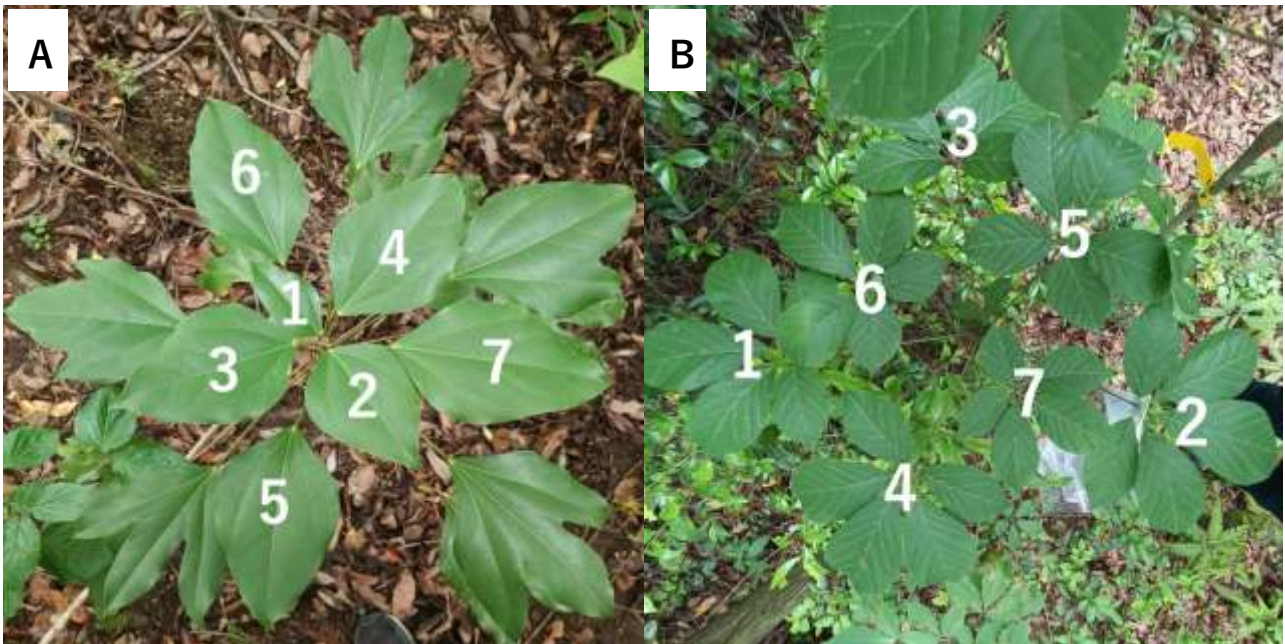


図. ウコギ科植物の葉の付き方の比較

(A) カクレミノ（上部の葉柄ほど短い） (B) コシアブラ（上部の葉柄ほど長い）

※数字は、幹の最上部から数えた葉の順番を表す。



広島市佐伯区倉重三丁目495

☎ 082-922-3600 📠 FAX 082-923-6100

- 開園時間 午前9時～午後4時半（入園は4時まで）
- 休園日 毎週金曜日
- 入園料 大人510円、高校生および65歳以上170円、中学生以下無料
- 駐車料 軽・普通自動車450円、中・大型車1,400円

